

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：看護学科

資格：助教（臨床）

氏名：谷口 俊恵

研究分野	研究内容のキーワード
精神看護学	薬物依存症者 家族
学位	最終学歴
修士（看護学）	大阪市立大学大学院看護学研究科前期博士課程修了 立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程在籍中

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要

1 教育方法の実践例		
1. 精神看護学Ⅱ	2017年4月～現在	「精神看護学Ⅱ」は、精神看護を実践するための具体的な知識と技術を学び、精神疾患や障害を持つ人に対する看護アセスメントの考え方を身につけることを目的とする科目であるが、科目責任者が狙いとする学習効果が十分にもたらされるように演習にかかわった。特に、事例展開では、学生が提出する課題をひとつひとつ丁寧に見ることにより、どんなところでつまづいているのかを知り、アセスメントや看護の視点のコツのつかみ方など、学生の思考や理解をサポートする指導を個別に行った。また、精神科における身体ケアの講義、身体拘束の演習では、主担当として授業を行った。
2. 精神看護学実習	2017年10月～現在	精神科病棟および地域における精神障害者施設でのかわりを通して、精神疾患・傷害を持つ人の抱える生活上の困難やその人の回復に必要な支援を考えることのできる実習となるよう、実習開始前に実習施設と十分な調整をした。多くの学生にとって、この「精神看護学実習」が精神疾患・傷害を持つ人に初めて出会う場となるのだが、精神疾患・傷害に対する偏見が世間一般に未だあるなか、精神科病棟に足を踏み入れることに不安や恐怖を感じてくる学生は少なくない。そこで、率直な思いを自由に打ち明けられる場を設け、困っていることはいつでも相談できる雰囲気大切に、学生が安心して実習に臨める環境を作り、適時のサポートができるよう努めている。また、この実習では、対象を理解するとともに、自分自身を理解することを実習の目標のひとつとしている。自分に向き合うことは決して容易ではなく、苦しさや痛みを伴うものであるが、学生の個性に応じたかわりで学びが深まるよう、実習指導者とも連携を図っている。
3. 初期演習（精神看護学分野紹介）	2016年11月	1年生の「初期演習」において、精神看護学でこれから学んでいくことを分野の教員3名でそれぞれ分担し、紹介した。そのなかで私が伝えたのは、看護の対象となる精神疾患・障害を持つ人が地域の中で生活する姿、回復のイメージだったのだが、TVの映像を取り入れたり、自身が取り組んでいる、依存症者の回復支援での活動の一場面の写真を用いたり、日常生活ではあまり接することのない精神疾患・障害を持つ人やその回復がイメージできるように工夫をした。
2 作成した教科書、教材		
1. 「精神科における身体ケア」（精神看護学Ⅱ）	2019年4月	精神科看護においては、抗精神病薬が身体に及ぼす副作用や高齢化に伴う身体疾患との重複など、ころだけではなく身体も観察できる能力が求められる。抗精神病薬の副作用については「精神看護学Ⅰ」ですでに学習したところであり、その内容を復習しつつ、それが演習の事例と関連付けて考えられ、また、実習で使える資料となるように、ポイントを整理した授業スライドおよび配布資料を作成した。
2. 精神看護学実習オリエンテーション資料	2017年10月～現在	精神看護学実習では、5つの病院と11か所の精神障害者通所施設の計16施設を使用する。分野別実習の直前オリエンテーションを実施するにあたり、実習施設への入り方、一日の流れのほか、実習にかんする諸注意事項などを細やかに示した、実習オリエンテーション資料を施設ごとに協同で作成した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 2017年度前期「より良い授業の取り組み」表彰	2017年9月	「精神看護学Ⅱ」の授業の取り組みが、日々の教育活動での授業改善につながる、より良い授業方法の工夫と実践を行うものであったと、学長より表彰された。この授業は心光准教授を科目責任者とし、實田教授、麻生助教の4名全員が担当したのだが、この授業の内容は実践につながる重要なものであり、その取り組みが評価されたことは、今後の教育活動の大きな刺激となった。
2. こころのケア論	2014年1月／2015年1月	他大学における、精神看護学の導入となる「こころのケア論」の授業で、アディクション（嗜癖）について考える1コマを担当した。「わかっているけどやめられない」

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
3. ファースト基礎実習 I	2013年7月／2014年7月	アディクションが実は身近な問題であることや、メンタルヘルスと深い関連があることなどをTVや映画を題材に用い、わかりやすく伝えられるように工夫をした。
4. まちの保健室実習	2013年5月～2014年10月	他大学における「ファースト基礎実習 I」で、2年生1グループを担当し、初めての病棟実習に向けての看護技術演習や事前学習および臨地実習での指導を行った。
5. 精神看護学Ⅱおよび精神看護学実習	2013年4月～2015年3月	他大学における「まちの保健室実習」で、2年生1グループを担当し、まちの保健室の利用者に行うバイタル測定技術指導、利用者の居住する地域についての調べ学習や健康教室の企画・実施にあたっての指導を行った。
4 その他		
1. 臨地実習委員	2017年7月～2018年3月	育児休暇中の准教授に代わって、精神看護学実習にかんする窓口として、実習施設との調整などを行った。
2. 看護師国家試験対策担当	2017年5月～現在	看護学部1期生全員の看護師国家試験合格を目指して、昼休みにミニ講義を行ったり、ひとりではなかなか勉強が進まない学生に対して個別面談・指導を行った。1期生全員合格という目標を達成した今、2期生、3期生もそれに続くことができるよう、個別面談・指導を行っている。
3. 学生委員	2016年5月～2018年4月	学生と教員、あるいは、異学年での学生同士の交流が深められるよう、学生幹事懇談会や学生交流会を企画・実施した。また、2017年度は、5月の体育祭で応援合戦に参加する1年生の練習にかかわったり、丹嶺宿泊研修に同行し、1年生担任の補助を務めたりした。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 看護師免許	2005年4月8日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 兵庫県看護協会主催 再就業支援研修会	2016年9月	兵庫県看護協会主催の再就業支援研修会にて、再就業を考えている未就業者を対象に看護技術の基礎および身体アセスメントの演習を担当した。
2. Freedom 薬物依存ABCラウンジ（家族教室）担当	2015年～現在	薬物依存症からの回復を支援する民間団体で、月に1回、家族教室を担当している。
3. 園田学園女子大学人間健康学部人間看護学科助手	2013年4月～2015年3月	精神看護学領域
4 その他		
1. Freedomボランティア	2013年～現在	
2. 拠点型・出張型まちの保健室ボランティア	2013年～2015年	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 薬物依存症者の親たちの困難感とその変化の要因—家族の語りを通して	単	2013年3月	大阪市立大学大学院看護学研究科	
3 学術論文				
1. 高等学校保健体育の教科書における薬物乱用問題—第3次覚せい剤乱用期以降の15冊を中心に—（査読付）	単	2018年3月	CoreEthics Vol. 14, pp. 125 - 135.	学校における薬物乱用防止教育は、「保健体育」科目を中核とするが、その内容にかんする先行研究は学習指導要領を対象にしたものしかない。そこで本編では、保健体育の教科書における薬物乱用問題の扱われ方の特徴を明らかにすることを目的に、第3次覚せい剤乱用期以降に発行の高校生用教科書15冊を対象に、具体的な記載内容を分析した。その結果、教科書に書かれている主な内容は、1) 薬物乱用における健康への影響、2) 薬物乱用による社会的影響、3) 薬物乱用防止対策であり、保健体育の教科書でありながら、薬物乱用については犯罪行為という側面に焦点があてられ、健康上の問題というより社会問題として扱われているという特徴があった。薬物乱用の未然防止のため、その危険性・有害性を強調したいという意図は理解できるが、乱用に至る背景には自尊心の低下や精神障害が関連していることから、メンタルヘルスの視点の乏しさは憂慮すべき

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
2. 薬物依存症者の親たちの困難感—自助グループにつながった親たちの語りより（査読付）	単	2016年3月	CoreEthics Vol.12, pp.197-207.	であると考え。薬物依存症者の回復において、家族の担う役割が注目されている。だが、家族自身に対する支援は十分に検討されていない。そこで本研究では、家族支援のあり方への示唆を得るため、家族がこれまでに体験した困難感についてインタビューを行った。対象となった5名の家族の語りには、まず薬物依存症者にかんする困難感があった。それらが自助グループでの体験を転機に改善していく一方で、我が子との距離の取り方の難しさや、薬物依存症の世間からの理解されなさといった新たな困難感が語られるようになっていた。疾患理解を促し、共依存を改めさせることは、家族教室などの教育的介入が狙いとするところであるが、距離を取りながらも薬物依存症という病気を持つ我が子の回復に親としてどのようにかわるのか、依存症者との関係性への理解と支持が家族支援の視点として不可欠である。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. The educational program nurses working in the field of addiction: Forcus on emotional support	共	2019年6月	ICN2019	Minori TAKARADA, Nahoko NISHIZAWA, Satomi TAKAMA, Keiko TAKITA, Toshie TANIGUCHI
2. We are the evidence! : The Recovery Parade in Japan	単	2018年10月13日	2018 East Asia Disability Study Forum, Taiwan	アメリカに端を発した、依存症、精神障害、生きづらさからの回復擁護運動は、日本では「リカバリー・パレード」として、東京では2010年から、その後、仙台、北九州、広島と広がり、関西では2016年から行われるようになった。「社会の偏見を取り除くのは回復者自身の責任である」。そんな信念をもとにしたリカバリー・パレードについて、ひとりのメンバーとして、その活動を紹介する。
3. Families dealing with drug problems: Examing the situations families based on their own accounts of their experiences	単	2018年10月13日	2018 East Asia Disability Study Forum, Taiwan	日本における薬物問題対策では、「家族支援」が目標に織り込まれているが、そのねらいは、家族を介した乱用者の薬物使用防止である。本研究では、ある民間団体が発行するニュースレターから家族の体験記事10編について、支援の場につながった家族の思いに焦点をあて分析をした。その結果、家族には「世間の目」を気にして支援につながりにくい状況があり、相談に行った先での対応に傷つく体験をしていることがわかった。
4. The Model of Emotional Support for Professionals in Substance use Treatment from the Results of the Interview Studies on Nursing in the USA and Japan	共	2017年10月	Transcultuarl Nursing Society 43rd Annual Conference, LA, USA	Minori TAKARADA, Nahoko NISHIZAWA, Satomi TAKAMA, Keiko TAKITA, Toshie TANIGUCHI
5. Qualitative research on the changes among nursing professionals in substance use treatment	共	2016年3月	19th EAFONS, Chiba, Japan	Minori TAKARADA, Nahoko NISHIZAWA, Satomi TAKAMA, Keiko TAKITA, Toshie TANIGUCHI
6. 地域で生活する精神障害者の歯科的現状と課題	共	2015年9月	第23回日本介護福祉学会	大川直美、野村慶雄、中村陽子、谷口俊恵
7. 薬物依存症者の親たちの困難感とその変化の要因—家族の語りを通して	単	2013年6月	日本精神保健看護学会第23回学術集会	
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 大切なのは、ご家族やフリーダムのスタッフと一緒に、ほんとうに使えるものを見つけていくこと	単	2019年4月	FreedomニュースNo.130	
2. こころに残ったカウントダウン—NAコンベンション	単	2017年9月	FreedomニュースNo.122	
3. 関西でもリカバリーパレード	単	2016年7月	FreedomニュースNo.116	
4. リカバリーパレードは始まって、続く	単	2016年12月	FreedomニュースNo.118	
6. 研究費の取得状況				
1. 薬物依存症者の家族の「言いづらさ」にかんする研究	共	2018年4月	基盤研究（C）	薬物依存症を持つ人は、本人が受診行動に至ることは難しく、その家族が治療導入のキーパーソンとなることが多い。しかし、使用薬物の多くは違法であ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
2. 法心理・司法臨床研究会	共	2017年7月～	立命館大学大学院先端総合学術研究科院生プロジェクト助成金	り、家族も身内の薬物の問題を他者に打ち明けることは容易ではない。本研究では、薬物依存症者本人の回復に向けて、家族が抱く「言いづらさ」を明らかにし、薬物依存症者の家族への支援のあり方の検討を目的とする。＜研究代表者＞ 佐藤伸彦（代表）ほか9名 近年、再犯者率の増加が問題となっており、社会内処遇のあり方について様々領域の専門家が検討をしているが、実践と理論の乖離や問題意識のずれが生じている現状がある。本研究会の課題は、それを解消するべく、共役可能性を探ることである。
3. アジアの精神障害者の自助活動研究プロジェクト	共	2017年7月～	立命館大学大学院先端総合学術研究科院生プロジェクト助成金	伊東香純（代表）ほか3名 アジアには、今もなお、コミュニティの中で檻に閉じ込められたままの生活を強いられている精神障害者がいる。本研究会では、精神障害者の自助活動のリーダーを育てるための教育の構造化を図ることを目的としている。
4. アディクション問題にかかわる看護職者支援モデルに基づく支援プログラムの開発	共	2017年～現在	基盤研究C	研究代表者：實田穂 研究分担者として、支援プログラム運営にかかわる。
5. アディクション問題にかかわる看護職者支援モデルの試案作成	共	2013年～2015年	基盤研究C	研究代表者：實田穂 研究協力者として、データ収集・分析・研究資料和訳を担当。 また、2013、2014年には、米国サンフランシスコの薬物依存症者の回復施設における現地調査に同行した。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2016年9月	第15回日本アディクション看護学会学術集会 事務局担当
2. 2016年10月	第27回日本嗜癮行動学会京都大会 企画運営委員
3. 2016年1月～現在	リカバリー・パレードin関西 実行委員
4. 2016年～現在	日本アディクション看護学会 会員
5. 2016年～現在	京都の女性の依存症者の回復を支援する会 運営委員
6. 2016年～現在	日本看護科学学会 会員
7. 2013年～現在	日本精神保健看護学会 会員
8. 2013年～現在	日本集団精神療法学会 会員